

1章 スポーツ少年団における 幼児加入条件の整備

1. スポーツ少年団の現状と課題

スポーツ少年団は、スポーツの遊びを一人でも多くの子どもたちに伝えたいと、約半世紀の間、地域の中で活動を続けてきました。その結果、スポーツ少年団は、多くの方々に支えられ、大きく発展することができました。

一方、スポーツ少年団におけるスポーツ指導は、競技化が進みつつあるといわれています。活動しているスポーツ種目が単一化され、そして勝つことだけを求める指導によって、不適切な指導が行われているとの報告もあります。この先に見えてくるのは、燃え尽き症候群や運動嫌いの子どもの姿です。また、早い時期の高度なトレーニングによるスポーツ障害も懸念されます。指導する立場となれば、「あれもこれも教えたい」「そのためにはもっと時間がほしい」「これだけやっているのになぜできないんだ」という思いもあるのかもしれませんが、しかし、スポーツ少年団の原点でもあるスポーツの楽しさやおもしろさを伝えることよりも、勝つことを優先するあまり、スポーツの厳しさや苦しさや際だった指導になっている可能性があります。

日本スポーツ少年団が主催する競技別の全国スポーツ交流大会に参加している指導者・団員の皆さんにアンケート調査を行ったところ、野球やバレーボールの公式練習日は、週5日間という結果になりました(表)。また、剣道やバレーボールの団員の50%以上が一度は「やめたい」と思ったことがあり、その理由の

一番は「練習が厳しい」というものでした。表にはありませんが、野球の年間試合数を尋ねたところ、100試合以上行っているチームが同大会に出場した16チームのうち7チームもあったのです。

日本スポーツ少年団では、単位スポーツ少年団活動の目安として、1日あたり2～3時間程度、1週間に2～3日が、無理のない活動としています。この目安は、スポーツ少年団で活動する子どもにとって、身体的、精神的に過度な負担がなく、意欲をもって参加できる活動量として推奨しています。

子どもたちが本当に望むスポーツ活動とは何でしょうか。特に、子どもたちがスポーツに出会う時期には、ルールにこだわり過ぎず、子どもたちの自発的な運動を育むような環境づくりや仕掛けが必要です。とかく私たちは教え過ぎるのではないのでしょうか。子どもたちにとって楽しく興味をもてる活動プログラムを提供できれば、団員の減少にも歯止めがかかるのではないかと考えます。

表 全国スポーツ少年団競技別交流大会参加者に対する調査結果

(日本スポーツ少年団、2007)

種目	活動日数 (日/週)	やめたいと 思ったことがある (%)	やめたいと思った理由 (上位3項目)
野球	4.8	31.2	①練習が厳しい(38%) ②良いプレーができない(14%) ③うまくならない(14%)
バレーボール	4.7	61.8	①練習が厳しい(36%) ②良いプレーができない(22%) ③友人関係(9%)
剣道	3.6	51.9	①練習が厳しい(49%) ②良い試合ができない(23%) ③うまくならない(8%)

2. 指導者の役割および 指導体制の整備

平成26年度のスポーツ少年団の団員登録について、小学生の人数は65万人で全体の87.8%を占めています。その内3年生以下は18万人(27.6%)と比較的少数であることから、スポーツ少年団の指導者は、基本的には小学4年生以上の児童を対象にスポーツ指導を行ってきたといえるでしょう。

従って、このような状況下で幼児の団員加入・運動指導ということになると、指導者の皆さんが大きな戸惑いを感じるのは当然のことと思います。言い換えれば、今までと同じような団員への言葉かけや指導法では通用しないということです。しかし、幼児や小学校低学年の子どもたちを受け入れる以上は、安全で効果的な指導を行わなければなりませんし、そのためには専門的な指導の知識や技能をもつことが求められます。従って、まずは指導者自らが資質を高めるための研鑽をし、率先して幼児期からの子どもの受け入れ・指導をしていただきたいと思います。

日本体育協会では、地域スポーツクラブやスポーツ少年団などにおいて、幼・少年期の子どもたちに遊びを通してからだづくり、動きづくりの指導を行う指導者の育成のために、「ジュニアスポーツ指導員」を養成しています。そのカリキュラムは、ジュニア期のスポーツの考え方、コミュニケーションスキル、動きの発達とスキルの獲得などの理論と、発育・発達過程を踏まえた運動遊びの展開や、基礎的動きを獲得させるための指導実践などの実技となっています。このように多岐にわたる内容から、子どもたちへの接し方・言葉かけ、発育に応じた運動遊びや伸

経と筋の連携を高める動きづくりなどを学ぶことができます。この資格の取得が、今後の幼児の指導には非常に有効と思われるので、これから幼児の受入体制を整える上で、ぜひ「ジュニアスポーツ指導員」の資格取得もご検討いただければと思います。

とはいえ、指導者一人で抱え込むのではなく、地域の人材を活用することも必要でしょう。幼児の運動を指導できる能力をもった指導者をスタッフに迎え入れ、複数の指導者による指導体制を確立することが大切と考えます。例えば、幼稚園・保育所等では、文部科学省からの幼児期運動指針を受けて、運動遊びへの意識も高まり、様々な取り組みが始まっています。そこで、地元の幼稚園教諭や保育士、幼児教育ボランティアに協力を求め、スポーツ少年団活動に参画してもらうことも非常に重要なことと考えます。まさに、地域の中でスポーツ少年団が核となって、幼児期からの運動遊びを提供することになるのではないのでしょうか。さらに育成母集団(特に母親)やリーダー(ジュニア・リーダー、シニア・リーダー)が参加してくれば、多くの目で見守る安全が確保され、より充実した活動が展開できるものと思います。

また、日本スポーツ少年団としては、指導者の皆さんに幼児指導の基本的なスキルを学んでいただけるよう認定員養成テキストを改訂すること、さらに指導者だけでなく育成母集団、リーダーおよび地域の関係者が安全・安心に幼児の指導に携われるよう、各種講習会・研修会の拡充を図りたいと考えています。一人でも多くの関係者に、資格の取得や講習会・研修会の参加を通じて、幼児指導のノウハウを学んでいただければと思います。

※ジュニア・リーダー：単位スポーツ少年団において団員の模範となって活動する、小学校5年生以上中学生までの者。

※シニア・リーダー：単位スポーツ少年団およびリーダー会において模範となって活動する、義務教育を終了した20歳未満のジュニア・リーダーまたは、ジュニア・リーダー認定資格者に準ずる者。

3. 育成母集団やリーダーの活用

アクティブ・チャイルド・プログラムの目的は“遊び”の体験を通してからだを動かすことや人と交わり協調することを自発的・積極的に行うことができる子どもを育み、心理的、身体的な成長につなげることです。しかし、週1～2回の遊び体験だけでは、大きな効果を上げることは難しいでしょう。そのため、スポーツ少年団での遊びを、子どもたちが家庭や園・学校、地域などで行うといった活動の広がりへとつなげることが大変重要になります。そこで、家庭や園・学校、地域との関係が深い育成母集団の活用が効果的になります。また、現在の子どもたちは縦割り（異年齢集団）で遊ぶ機会がほとんどなく、横割り（学年毎）の団結はあるのですが、異世代の団結があまり見られません。しかし、異年齢集団での遊びは、年上の子どもの行動を見習ったり、年下の子どもをいたわったりすることによって、自然によい動きの習得や社会性が育まれる場として非常に重要です。そのため、団員と年齢が近く、団員の気持ちを理解してグループをまとめ、さらに目標に向かってグループを前進させることのできるリーダー（ジュニア・リーダー、シニア・リーダー）の活用が効果的になります。育成母集団やリーダーを効果的に活用するためには、母集団研修会やリーダースクールへの参加を積極的に促し、単位スポーツ少年団活動において彼らが活躍できる場を提供することで動機づけ、指導者、リーダー、育成母集団が共通理解と協力体制のもと、ともに子どもたちを見守り、育てることができ環境を整備することが重要です。

育成母集団やリーダーの役割

①遊びの先導役（プレーリーダー）としての役割

保護者やリーダーが遊びの先導役（プレーリーダー）となって、楽しい雰囲気をつくり一緒に遊ぶことで、子どもたちを効果的に動機づけることが期待できます。ただし、その場をまとめる、仕切ることに意識が向き過ぎる結果、一方的に指示・命令をしたり、見守ることができずに手や口を出し過ぎる（過保護・過干渉）ということがないようにしましょう。また、遊びの先導役を、大人からリーダー、そして団員へと段階的に移行させることで、子ども自身が主体的に工夫したり、ルールや作戦を考えたりできるように配慮しましょう。

②動きのモデルとしての役割

保護者やリーダーと一緒に遊び、動きのお手本となることで、子どもたちの多様な動きの習得が期待できます。鬼遊びの中で、走りながらからだを捻ったり緩急をつけるなど基礎的な運動パターンに速い、遅いなどのバリエーションを加え、発達に合った様々な動きを示し、子どもたちが興味をもち、イメージをもって動けるよう配慮しましょう。

③心理的なサポートをする役割

保護者やリーダーと一緒に遊ぶ中で、子どもたちの行動のよいところをみつけて効果的にほめたり、肯定的な言葉かけをすることにより、「やった!」「できた!」という達成感や有能感（自信）をもち、自己肯定感を高めることにつながります。その結果、子どもたちの行動がより積極的になり、運動する機会の増加が

期待できます。しかし、「だめだ」「できない」という失敗経験や他者からの否定的評価は無力感や劣等感をもつことにつながり、行動も消極的になってしまいます。そのため、集団の中で仲間からの否定的な言動があった場合には、適切な援助ができるよう配慮しましょう。

育成母集団やリーダーを活用する効果

①家庭への広がり

保護者自身が遊びを通してからだを動かすことの楽しさを体験し、一緒に遊びを覚えることで、家庭でも親子で一緒にからだを動かす機会が増えるため、運動の習慣化と家庭でのモデリング効果で子どもの動きの洗練化が期待できます。

②子どもたちの意欲を引き出す効果

団員と年齢の近いリーダーが遊び仲間として一緒に遊ぶことで、親近感をもった子どもたちがリーダーの動きを真似したり、からだを動かすことの楽しさを感じることで、自発的、主体的にからだを動かす意欲を引き出すことが期待できます。

③指導者にとってのメリット

指導内容により役割を分担することで、指導者の負担が軽減されるだけでなく、短期間に活動内容や指導する人間が変わるため、気持ちの切り替え効果によって子どもたちの集中が持続される効果が期待できます。また、育成母集団、リーダーによる指導の間は団員の客観的観察が可能となり、指導者が団員の特徴をより詳細に把握でき、効果的な指導につながることを期待できます。

育成母集団やリーダーを活用した指導の実践例

